

レットテルを貼るな

[エゼキエル書 36 章 22～32 節]

「それゆえ、イスラエルの家には言いなさい。主なる神はこう言われる。イスラエルの家よ、わたしはお前たちのためではなく、お前たちが行った先の国々で汚したわが聖なる名のために行う。わたしは、お前たちが国々で汚したため、彼らの間で汚されたわが大いなる名を聖なるものとする。わたしが彼らの目の前で、お前たちを通して聖なるものとされるとき、諸国民は、わたしが主であることを知るようになる、と主なる神は言われる。わたしはお前たちを国々の間から取り、すべての地から集め、お前たちの土地に導き入れる。

わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。お前たちは、わたしが先祖に与えた地に住むようになる。お前たちはわたしの民となりわたしはお前たちの神となる。わたしはお前たちを、すべての汚れから救う。わたしは穀物に呼びかけ、それを増やし、お前たちに飢えを送ることはしない。わたしが木の実と畑の作物を豊かにするので、二度と飢饉のために、国々の間で恥をこうむることはない。そのとき、お前たちは自分の悪い歩み、善くない行いを思い起こし、罪と忌まわしいことのゆえに、自分自身を嫌悪する。わたしがこれを行うのは、お前たちのためではないことを知れ、と主なる神は言われる。イスラエルの家よ、恥じるがよい。自分の歩みを恥ずかしく思え。」

[1] 神様が分からない

私は改めて思うのですが、なぜ私たちは毎週日曜日に教会に行くのでしょうか。もちろん「礼拝」「証し」、色んな言い方で言えると思うのですが、一つには私たちが神様を知らないからなのではないか、とも言えると思うのです。まるで受験勉強のように、私はもう神様のことは分かった、安心だという気持ちになったら、もう教会と関わりを持つ必要はなくなってしまうかもしれないと思います。神様のことを「分かった」なんていうことは一生かかってもないと思います。牧師や神父ももちろんそうです。そして、それはもしかしたら、旧約聖書のイスラエルの民の歴史にも似ているのかもしれない。彼らの歩みというのは、神様という方をいつも眼前にして、その神様に従って歩いて

きたという歴史ではなくて、過ちも含め、色んな辛い出来事を経験してきて、その中で「ああ、神様とはそういうお方か」といことを発見し続けてきたという歴史なのだと思います。

イスラエル民族は一彼らは自分たちは神様に特別に愛されている民族であるという自負（選民思想）を持っていました—エゼキエル書の時代、自分たちの存在根拠を失うような危機の中にあつたのです。神様が特別に目をかけて下さっている民族なのに、異教徒のバビロン帝国に屈服させられ、主だった人々は連行されたり、殺されたりしている。「バビロン捕囚」ですね。エルサレム神殿も落城というか、無残な姿になり、これまで自分たちが信じて来た神様は幻だったのか、自分たちはこれから何に望みを置いたら良いのか、全く分からなくなってしまうていたのです。それは大きな「闇」であつたと思います。

[2] 神様が人間をあきらめない

今日の箇所エゼキエル書 36 章と来週見ます 37 章は、そのイスラエル民族の回復の預言です。例えば 3 節にはこうあります。「お前たちは周囲の者に荒らされ、踏みにじられ、他の国々の所有となつた」。荒廃したイスラエルの国の姿です。それに対して主なる神様は、エゼキエルにこう告げよと言います。8 節。「しかし、お前たちイスラエルの山々よ、お前たちは枝を出し、わが民イスラエルのために実を結ぶ。彼らが戻って来るのは間近である」。この捕囚の期間は 70 年にも及ぶのです。私たちはこのコロナ禍、既に 1 年半長いなあと思いますけれども、70 年間ですよ。世代がもう完全に次の世代に移っています。つまり、帰還出来ずにそのまま異国の地で死んでいった者たちの方が多かったということです。

異国の民から「お前たちの神はどこにいる」と揶揄されて、ただただ悔しい惨めな思いをしていたイスラエルの人々…しかし、このことを通して彼らは新しい信仰理解に導かれたに違いないと言われています。例えば、最近私がインターネットで読んだ鈴木文治先生（日本基督教団桜本教会伝道師）という方の文章の中にこのようにありました。「ユダ国が滅ぼされ、バビロンへ強制移住させられ、捕囚の民となつたユダヤ人は自らの「選民思想」をどのように捉えたのか。一般的な土着宗教であれば、人々に大いなる恵みを与える神を信じ、その神への信仰があつても災いに遭うことが起こればその神は人々から廃棄される。」「しかしユダヤ人たちはそうしなかつた。自分たちに起きた破滅的な出来事を神との契約の中で自分たちがそれを破つたことへの神の怒りと受け止めた。ここに信仰の内省化が示されている。「選民思想」は、地上の繁栄を約束するものではなく、神との特別な契約によって、神と向き合う生き方の意識に変わっていった。むしろ、

祖国の滅亡のうちに神への復歸の動きが始まったのである。他民族との比較における「選民思想」ではなく、信仰の純化がそこに示されるものとなっていた」。『キリスト教におけるインクルージョン研究Ⅱ』)。

この「バビロン捕囚」によって、「選民思想」というものの上にあぐらをかき信仰ではなく、自分たちは正しく神への応答に生きて来たのか、それを問い始める信仰の生き方に深められていく、その契機になったというのです。人間とは頑なで、様々な経験をしないと神様になかなか立ち帰ることが出来ない存在であるということと、逆に言うなら、神様は長い年月をかけながら、ご自分の民を忍耐しながら育てられるお方であるということが言えると思います。私たちはもしかすると、**神様に対してもレッテル貼りをしていることがない**でしょうか。目先の出来事で判断し「こんな神様は神様ではない」、「これでは信仰を持たない方がマシだ」と、辛いことがあるとそう思ってしまいやすいのが人間だと思います。

ところが今日の箇所、**神様の方が、人間をあきらめていない**ことが分かります。22 節から見て頂きたいですが、面白い表現があります。神様はご自分の「名」、汚されてしまった“わが聖なる名のために”イスラエルを回復をさせるというのです。—「**主なる神はこう言われる。イスラエルの家よ、わたしはお前たちのためではなく、お前たちが行った先の国々で汚したわが聖なる名のために行く。わたしは、お前たちが国々で汚したため、彼らの間で汚されたわが大いなる名を聖なるものとする。わたしが彼らの目の前で、お前たちを通して聖なるものとされるとき、諸国民は、わたしが主であることを知るようになる、と主なる神は言われる**」。—今神様は、事をなそうとされています。「神などいるか」と諸国民の民に汚されてしまった**ご自分の名を**、歴史を動かすことによって、再び諸国民に明らかにするのだ、と。

“神様の出番”というのは、私たちの思い通りではないのですね。イスラエル民族も、このような存亡の危機の真只中で新しい神様の御声を聞いたのです。私たちの人生、確かなかなか理解出来ないことは多いですね。私も、個人的なことを言えば、2 年半前の突然の妹の事故死。これは本当に謎です。そしてずっと謎のままでしょう。けれども神様がいらないなどとは思いませんでした。どうしてかならば、私はそこで神様に訴えることが出来ましたから。主よ！と祈ることが出来ましたから。神様はあらゆることを通して私たちに語りかけておられるのだと思います。時には不思議な奇跡的な出来事をもってご自分が生きておられることを示されることもあるでしょうし、静かな毎日の営みの繰り返しの中で、自分の心が癒されていくということもあると思います。そして何よりも私たちには、あの**十字架の主**がどんな絶望と思える中にも共におられる！ということ、

そのことを覚えていたいと思います。

[3] わたしが新しい心、新しい霊を置く

この 36 章の中の特に重要な言葉は 25～26 節です。「わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える」。

今日私は「レッテルを貼るな」という題を付けさせて頂いたのですが、一般に信仰の世界が敬遠されがちなのは、信仰を持っている人が、自分の心を固くしてしまって、それこそ「選民思想」ではありませんけれども、自分は救われているけれども、神様を信じない人は滅ぼされてしまうという考えを持ち、周囲から見ると、とても狭い人のように見えてしまうということがあるのではないかと思います。私は、「信仰者」とか「不信仰者」というのは、外側からは分からないことです。レッテルは貼れません。あのイスラエルの人たちは自動的に皆「信仰者」なのではないでしょうか？ そうではないでしょう。私たち「人間」の中に、信仰も不信仰も両方あるのです。いや、基本的に人間というのは不信仰なのだ、と言っているのが聖書であり、またイスラエルの歴史なのだと思います。大事なことは、そんな私たちを神様は見捨てない。憐みがある！ ということです。

「わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。一神様の一方的な赦しがここにあります。そして赦されたものは、縛られてではなく、自分の自発的な思いで神様に従って行くのですね。それが可能になるように、神様ご自身が、「わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く」と宣言されます。

私があなたに「新しい霊」を送るのだ、あなたがたはもう滅びることはない。新し心に生きよ！ と。それは新約の時代になって、決定的な出来事になりました。「神はその独り子をお与えになった。それは御子を真じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである」。(ヨハネ 3:16)

これが神様が、「わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える」とおっしゃった意味だと思います。私たちの石の心・不信仰を打ち砕き、こんな者も神様に立ち帰るように神様はイエス様を送って下さった。一人も滅びないためです！ 今、私たちは皆このキリストにあって、真の「選民」、「愛されている民」、神様の祝福を受け継ぐものとされているのです！ 日々の営みの中でこの主の大きさを受け止めながら、感謝の中で生きてゆくことが出来ますように。

お祈り致します。